

千葉菌類談話会通信

Chiba Mycological Club Bulletin

	ページ
目次：きのこ古譚（四）.....1	お知らせ.....6
海岸林のキノコ盛衰記（1）.....2	表紙によせて.....8
幹事会報告.....3	キノコクロスワード.....9
行事案内.....3	



May. 1994 No. 7

きのこ古譚（四）

根田 仁

— たかがシイタケ、されどシイタケ —

最近是中国産におされ気味のシイタケも、まだまだ食用きのこの代表選手ではある。さぞかし昔から食べられていたことが推測されるが、文献に登場するのは意外に新しい。最も古いのは、1223年に道元が宋（中国）に留学した際、日本船が着くと寺の老僧が乾シイタケ（倭榎）を買いに来たという話で、「典座教訓」に載っている（シイタケではなく、桑の実であるという説もある）。その後は1465年の日記に伊豆の円城寺（現・韮山町）から將軍足利義政に贈ったことが載っていたり、1495年の節用集（当時の辞典）に登場するくらいで、あまり記録に残っていない。これ以後は料理材料としてありふれたものになるのに、なぜだろうか？

ちなみに中国では、シイタケは中華料理に欠かせないものである。1313年の「王禎農書」に香蕈の栽培法が載っている。「日陰の場所を選び、楓（フウ）、楮（カジノキ）、栲（シイ）などの木を伐り、斧で傷をつけ、土をかけて置く。数年できのこが発生する。……。」また、楮木を槌で叩いてきのこを発生させる手法も既にあった（「驚蕈」と呼んでいた）。この記述と同様のものが、日本の農業全書（1697年）にも載っている。ただし中国では、その後シイタケ栽培が盛んになったという話は聞かない。栽培技術が未熟だったからか、原木が潤沢ではなかったからではないかと思う。しかし日本では、立派な産業になっていた。

兎園小説という江戸時代の書物に以下の話が載っている。「伊豆の岩地村という所の獵師の子で斉藤重蔵という者が14歳の時、兄と一緒に仕事のため、家を出てシイタケを作り、その商売のために諸国を歩き回っていた。兄は三、四年後には、弟と別れて故郷に帰り、両親と一緒に暮らすようになり、30年近くたった。ところが、豊後国（今の大分県）岡という所から、25両が岩地へ送られてきた。ところが一切心当たりの無いことなので、豊後から岩地へとはどのような縁のある人なのかと早速書状を書き、その返事で初めてわかった。14歳の時、家を出た重蔵のことで、岩地村では30年ばかり便りのない人だったので、このような書状とお金が送られてきたことで、夢だとばかりに喜んだ。（重蔵は）豊後国で、シイタケの栽培を知らないところへ、作り方を教えたところ、国益になるということで、領主の召し抱えになり、毎年70両の金を賜り、岡の岳山というところで、大きな家を建て、だんだん成功し、300余人の召使いがいるまでになった。毎日シイタケを作り、串に刺して焼いて、大坂に出し、春と秋とで2万両も取る財産家になった事が手紙に書いてあった。（後略）」

ちなみに大分県では、豊後の源兵衛という炭焼きが、炭にする木に鉋目を入れたまま、山に放置したところ、シイタケがその木から発生し、シイタケ栽培法を開発したという事になっている。この原木に鉋目を入れて温湿度を管理し、空気中に浮遊しているシイタケ胞子を利用して栽培を行うという手法は、つい半世紀前まで行われた栽培法である。

海岸林のキノコ盛衰記

海岸林でキノコがたくさん採れた時の話 (盛その1) 腰野 文男

— 鹿島のクロマツ林のキノコ (日記の一節より) —

昭和28年(1953年)という今から40年も前になるが、10月のある日、職場の同僚であったNさんから「今度、千葉市のアスナロ会のメンバーで20才前の女性ばかり6~7年でキノコ狩りをやることになり引率してくるので、案内をお願いしますよ」と頼み込まれてしまった。場所は、その頃キノコがよく採れると話題になっていた鹿島の海岸林にしようという事になり、当日はなにせ独身時代のことであり、若い美人(その頃女性は皆、美人に見えたかも)ばかりの案内とあって、早朝から張り切って出かけていったように思う。一行は小見川町から息栖神社のある神栖まで川を船で渡って目的地に向かった。その頃は、現在鹿島臨海工業地帯になっている神栖町から鹿島町にかけては、見渡す限りクロマツの海岸林が見事に発達していて、キノコ狩りには格好の場所であった。松林の中はコケ類がよく繁茂して緑の絨毯を敷いた様になり、その上にクロマツの落ち葉が積もって、茶色のベールで包んだ様な感じできれいになっていた。一行はその中を思い思いにキノコを求めて探し歩いた。A嬢がイグチの類を見つけ「これは何と言うキノコですか」と聞きにやってきた。「これはアマタケと言うキノコで下総地方ではシバタケといい美味しいキノコですよ」と答えると大喜びで、また探し歩いた。それからまもなく、「あったわ、こちらにもあったわ」という彼女達の嬉しそうな声を耳にするようになり、かごの中にはアマタケ、ヌメリイグチ、チチアワタケ、オウギタケ、クギタケなどが見られたが、それから約1時間ぐらいたっただろうか、海岸林のキノコの王者であるハツタケが採れ始まった。あるある、おそらく1人50~100個位づつは採ったであろうか。その採るときの感触はまさにキノコ狩りの醍醐味といえよう。人間は正直なもので、彼女達のかごの中はいつしか雑キノコが捨てられてハツタケとアマタケばかりに入れ替わっていた。時間の経つのも忘れていたが、日も落ちてきたので、彼女達の希望でとうとうハツタケなどキノコの美味しい料理法の話を一席することになってしまったが、そのとき聞き入ってくれた嬉しそうな彼女達の顔は今だに忘れられない。

※1963年、鹿島灘の砂丘地帯が工場整備特別地区に指定され、鹿島臨海工業地帯の建設が始まって、鹿島のクロマツ林は昔の面影も無いほどすっかり開発されてしまった。今は残存するクロマツ林から時折キノコが採れると言う噂を耳にするだけになってしまった。この海岸林でキノコがたくさん採れたことを書いた当時の日記の一節は、もはや遠い日の思い出でしかない。



幹事会報告

3月19日に幹事会を開き、94年度から県外協力幹事、図鑑編集幹事を新たにおくこととなりました。そして、旧役員9名に新役員7名を加えることになりました。

4月10日には新メンバーも加わっての幹事会を開き、94年度の行事予定、会報発行等を話し合いました。

1.94年度千葉菌類談話会役員（50音順）

会 長：腰野文男

採集・企画幹事：相京康、阿部代始子、石田いし子、大作晃一、吉田幸二、吉田悦子

会報編集幹事：小沼良子、北川公子、小西弘倫、野村麻結実

事務局担当：小沼良子、北川公子、吹春俊光

県外協力幹事：池田和加男、菊池栄子、矢部和子

図鑑編集幹事：大作晃一、腰野文男、佐野悦三、吹春俊光

2.94年度行事予定

1) 総会

第2回 94年 7月23日（土）中央博物館会議室 *別記参照

2) 講座

第3回 95年 3月11日（日）硬質菌 講師：服部力

3) 採集会

第9回 94年 7月 9日（土）一宮海岸（担当：相京、大作）

第10回 94年 9月17日（土）泉自然公園 講師：本郷次雄（担当：阿部、石田）

第11回 94年10月15日（土）市原市民の森 講師：服部力（担当：吉田夫妻）

4) スライド大会と懇親会

第3回 94年12月 3日（土）中央博物館会議室

（担当：企画・阿部、大作 会場：北川、大作 会場準備：吹春 懇親会：相京、北川）

5) 会報発行予定 年3回（5月、8月、1月）発行予定

94年度行事案内（4月～9月）

第2回総会のご案内

第2回の総会を以下の通り開きます。なお、総会が終了しだい中央博物館企画展「不思議なキノコ」の見学を行います。

日 時：7月23日（土） 13:00～14:00

場 所：千葉県立中央博物館会議室

何も行事がないと叱られるので、企画展「不思議なキノコ」の見学会を行います。公僕吹春の解説つきで14:00からです。

あらかじめ出席人数を把握したいので、出席される方は普通の葉書で6月30日までに住所、氏名、人数を明記の上事務局へご連絡ください。（担当：相京、北川、野村）

写真勉強会のご案内

去年は伊沢さんのすばらしい講座をうけた。でも、やっぱりそんなにうまくはいかない。どうしてだろうか？ 密かに悩んでいる人はけっこう多い。そんな悩みを打ち明けて、一步前進しようではありませんか。そしていつかは伊沢さんのような美しい写真が撮れるように。今年は数回にわたり、写真勉強会を行っていきたいと思います。伊沢さんが解説してくれたことを、もう一度復習しながらこつこつと実践していきましょう。

テーマ：「ピンボケをなくそう」

日時：第1回 94年6月 4日(土)
第2回 94年6月18日(土)
どちらも10:30～15:00

場所：泉自然公園
千葉市若葉区野呂町108
TEL043-228-0080

集合：10時に駐車場奥の大きな木の下
持ち物：カメラと撮影道具、
自分のプリント写真(特に不満におもっているカット)、弁当

会費：100円

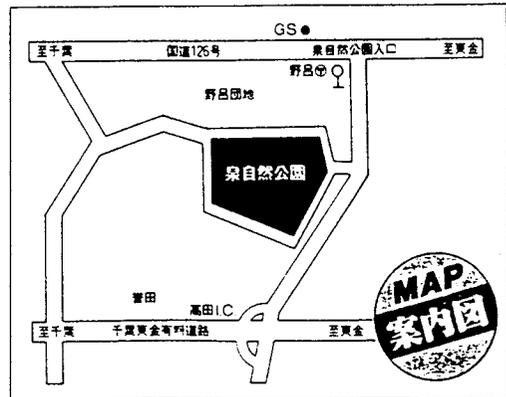
申し込み：5月30日(月)迄 普通の葉書に
参加日、住所、氏名、人数を明記の上、事務局へご連絡ください。

幹事：大作晃一(0471-53-5796)、阿部代始子(043-236-0498)

交通：JR千葉駅または京成電鉄千葉中央駅より、ともにバス停7番線成東行きか中野操車場行きで「泉自然公園」下車、徒歩10分。

*バスは1時間に4本程度、約40分、480円

*雨天決行



第 9 回採集会案内

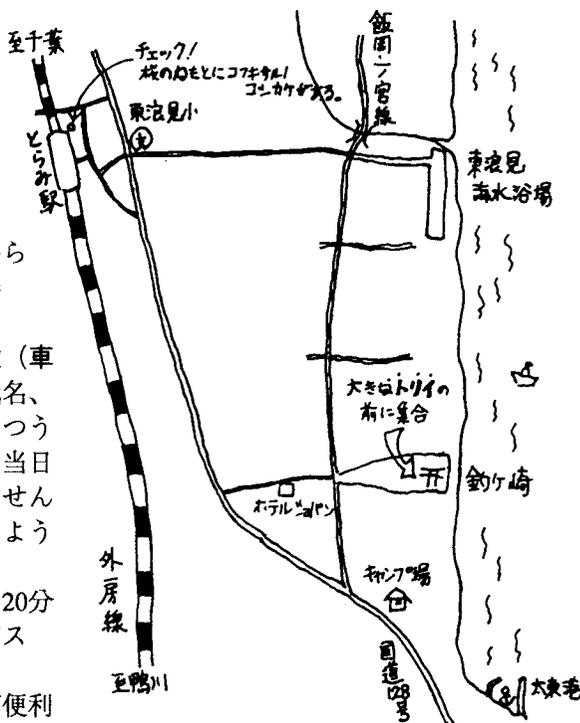
日 時：7月9日（土）
 10:00～15:00
 場 所：一宮海岸（左記参照）
 集 合：10時に駐車場奥の
 釣ヶ崎の大きな鳥居の前
 持 物：昼食、採集道具他
 担 当：相京康（043-279-6860）
 大作晃一（0471-53-5796）
 会 費：100円

同定会場：県立一宮キャンプ場で1時から
 行いますので遅れた方は直接
 行ってください。

申 込：6月30日迄に当日の交通手段（車
 か電車か）、参加日、住所、氏名、
 人数を必ず明記して事務局へふつう
 の葉書でお申し込みください。当日
 は、傷害保健には加入していません
 ので、各自ケガ、事故等のないよう
 にご注意下さい。

交 通：J R外房線東浪見駅下車徒歩約20分
 あるいは上総一宮駅下車小湊バス
 「太東」行きで「鳩山」下車
 千葉発8:15→東浪見駅着9:32が便利
 ※9:30に車で東浪見駅に迎えに行きます
 ので電車で来られる方は駅でお待ちください。

*雨天決行



第 1 0 回採集会案内

日 時：9月17日（土） 10:00～15:00

場 所：泉自然公園（別記参照）

集 合：10時に駐車場奥の大きな木の下

講 師：本郷 次雄（滋賀大学名誉教授）

持 物：昼食、採集道具他

担 当：阿部代始子（TEL043-236-0498）、石田いし子（TEI 043-262-9298）

会 費：500円

申 込：8月30日迄に参加日、住所、氏名、人数を明記して事務局へふつうの葉書で
 お申し込みください。当日は、傷害保健には加入していませんので、各自ケガ、
 事故等のないようにご注意下さい。

交 通：J R千葉駅または京成電鉄千葉中央駅より、ともにバス停7番線成東行きか
 中野操車場行きで「泉自然公園」下車、徒歩10分。

*雨天決行、草むらを歩きますのでマムシに注意。

お知らせ

今年のスライド大会について（予告）

今年のスライド大会は、より多くの人達が参加してもらえるように、いろんな事を考えています。例えば、カメラをもっていない人でも、ご自慢のスケッチブックをもってきてもらったり、ネガフィルムで撮影している人はアルバムをもってきてもらったり。特に初心者の方、「自分の写した写真を人様にお見せするなんてとんでもない！」なんて、そんなに謙遜しないでください。みんなに見てもらうのが上達の近道。良きアドバイスをうけて今後の撮影に役立ててください。というわけで、何でもありのビギナーズコーナーを設けたいと思います。

最後にもうひとつ。「イグチを見つけよう！」を今年のテーマとして、イグチの写真を大募集します。千葉県は土地柄、いろいろと珍しいイグチ類が観察できると思います。さて、どんなイグチが集まるのか楽しみです。どうでしょう、今年のスライド大会はこんな感じで進めていきたいと思えます。他にも何かご意見がありましたら、なんなりとお申し付け下さい。みんなでつくる楽しいスライド大会にしていきたいです。 （企画担当）

千葉県キノコ図鑑の夢

会の目的は壮大なほど良い、ということで、本年度の談話会幹事会で、千葉県産キノコ図鑑作成のためのスタッフが組織されました。密かに宝くじを買い、図鑑作成の偉大な1歩を個人的に歩みはじめた会員に敬意を表しての動きでもあります。5月5日に図鑑のための最初の集まりを持ちました。出版社も、資金も何もあてのない集まりでありましたが、だいたい次のようなことを話し合いました。

★図鑑の規模：未定

★発行部数：3000部以上（が採算のとれる部数であるため）

★図鑑の内容：分類群では変形菌を含む、とにかく特徴を出したものにする

★記載する種：標本の裏付けのある種、千葉県の特徴をよくあらわす種

★記載以外の記事：千葉県内の採集マップ、料理関係の紹介記事等

★写真の形態：伊沢風

★監修：本郷次雄

★執筆・写真：千葉菌類談話会

★年間予定：1994年（本年）は千葉県産菌類のリストアップ、写真のチェックリスト作成、写真他情報の収集案作成を予定。5年後の1998年（平成10）までに原稿作成、編集終了予定。本郷先生に監修をやっていただける1999年（平成11）頃をめどに出版予定。

写真の収集や他情報の収集に関しては決まりしだい会報で報告いたします。本案に意見のある方、良いアイデアをお持ちの方は会事務局までお知らせ下さい。よろしく願います。（図鑑編集担当）

メッセージのせます

本会にメッセージをお寄せください。会費の振り込み用紙に書いていただいたメッセージは会報に載せていこうと思います。情報、興味、疑問、料理、中毒など（キノコに限らず）何でも結構。イラストも歓迎です。それと、誕生日（あるいは星座）と血液型も振り込み用紙でお知らせ下さい。会員名簿にそういった情報も載せていこうかと思っています。ただの住所録でない名簿にして楽しんでみましょう。（会報担当）

会計から

1.93年度会計報告(93.4.1~94.3.31)

収 入		支 出	
会費	111,000	通信費	73,725
前年度繰越	57,755	講師料	40,000
雑収入	40,664	雑費	31,218
		次年度繰越	64,476
合計	209,419	合計	209,419

2.会費について

- (1) 94年度会費は1000円とする。(中学生以下は半額の500円)
- (2) 家族で入会の場合は代表者1名分の会費の納入でよい。
- (3) 2年間にわたり会費の納入及び連絡のない場合は退会とみなす。
- (4) 会の催し物などで必要なときは、参加費を徴収する。

会費未納の方へ 93年度会費が未納の方は、封筒宛名ラベルに「☆93年」の印がありますので納入をお願いします。

会費納入方法 原則として郵便振込。振替口座：00100-5-550400「千葉菌類談話会」
※何年度分か必ず明記すること。

中央博物館の催し物

◎企画展「不思議なキノコ」 94年7月23日(土)~9月18日(日)

※9月1日(木)~12日(月)は燻蒸のため臨時休館

千葉県内でよく見られるキノコについて写真、実物標本、レプリカ等で解説します。あわせて菌類の様々な、そして不思議な生活を紹介します。

◎「菌学講座」

1.開催日時・講座名

- 第1回94年9月18日(日)「ハラタケ目講座」講師：本郷次雄(滋賀大学名誉教授)
- 第2回94年11月27日(日)「医薬品に利用されるカビ」講師：内藤敦(三共製薬)
- 第3回94年12月18日(日)「コウジ菌の分類」講師：堀江義一(中央博物館)
- 第4回95年2月12日(日)「ハラタケ目のどこかの科の分類」講師：吹春俊光(中央博物館)

*いずれも午前10時~午後3時まで。定員16名。参加費無料。

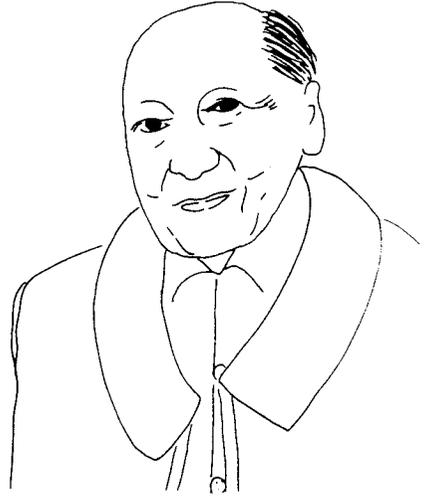
2.場所：千葉県立中央博物館研修室

3.申し込み方法：参加ご希望の方は各講座開催日の1ヶ月前から2週間前までに、下記宛先まで往復葉書で、年齢・住所・電話番号を明記の上お申し込み下さい。申し込み多数の場合は抽選となります。なお、各講座は独立した講座となっており、それぞれ御申込頂けます。また連続して参加ご希望の方はその旨明記して一枚の往復ハガキでお申し込み下さい。

4.申し込み先：千葉県立中央博物館植物学研究所、第〇回菌類講座「・・・について」

〒260 千葉市中央区青葉町955-2番地 電話：043-265-3921(植物科)

メルツァー試薬を御存知だろうか。ヴァーツラブ・メルツァー (Václav Melzer) は、顕微鏡でキノコの胞子を観察するとき、その胞子を染めるのに用いるメルツァー試薬を発明した人である。メルツァーは20世紀を代表するチェコスロバキア生まれの偉大な菌類学者で、1878年8月26日、西ボヘミアのブルキーシュ村で教師の息子として生まれた。メルツァーも小、中学校の教師となり56才から4年間は中学校の校長となった。二度結婚し、最初の妻との間には2人の娘が生まれたが2人とも若くして亡くなった。彼は、生まれつき自然に興味を持ち、学生時代には植物学を、教職に就いた頃は苔や地衣類を、そして、30才頃から大型菌類の勉強を始めるようになった。教師として大型菌類の一般的な勉強をしていたメルツァーは、35才のときフランスの菌類学者ルネ・メール



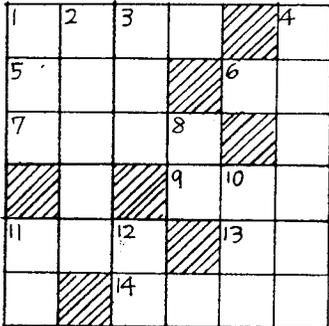
(René Maire) のベニタケ属の分類に関する論文を手に入れ、当時最も難しいとされていたベニタケ属の研究を始めるようになった。それは、肉眼的特徴と顕微鏡の特徴の観察の記載を必要とした。こうして、一介の学校教育者であったメルツァーは菌類研究の道へと入っていく。さらにブラハのJaroslav Zváraとの共同研究によりメルツァーの研究はますます発展し、49才のときに著した「ボヘミアのベニタケ節 (České holubinky)」という論文は彼らの研究の到達点を示すものである。メルツァーはベニタケ属の研究における重要な手法を開拓したが、その冠たるものがメルツァー試薬の発明である。これはいろいろな試行錯誤のもとに開発されたもので、1924年、メルツァー42才の時にその処方が発表された。これは、沃化カリウム1.5g、沃素0.5g、蒸留水20g、抱水クロラール22gを調合した液で、顕微鏡下でベニタケ属の胞子の模様を微細に観察するのに都合よく、たちまち菌学におけるスタンダードな試薬となった。まもなくベニタケ属だけでなく白い胞子を持つ他のキノコのグループにもメルツァー試薬は使われはじめた。というのは、この試薬を使うことにより胞子膜のヨード反応がみとめられたのである。この胞子膜のアミロイド形質を分類に利用することは、様々な分類群においても行われた。そして、白い胞子をもつハラタ類の分類はメルツァー試薬によって急速に発展した。さらにメルツァーはベニタケ節の分類にキノコの肉眼的な化学的呈色反応を導入した。例えば、フェノールと硫化第二鉄 (1923)、アンモニアと水酸化ナトリウム (1923)、 α -ナフトール (1927)、アニリン (1928) である。こうしてメルツァーは肉眼的および顕微鏡的な特徴を詳しく研究し、ベニタケ属の種の分類はかなり進んだ。メルツァーは Zvára と共同でベニタケ節のオリジナルな論文を45書き、10冊の本を書いた。Zvára が肉眼的な特徴を、メルツァーが顕微鏡的および化学的呈色反応の特徴をとりあげ、ボヘミアにおけるベニタケ属の分類をおこなった。彼らの研究はさまざまな面において独創的で先進的なものであり、ベニタケ節に関する論文は当時の国際誌であるフランス菌学会の会報に転載され、シンガー (R.Singer) などの外国の第一線の研究者たちにより高く評価され、世界の菌学者の間で様々な議論を巻き起こした。このように、一介の教育者であったメルツァーはほとんど独学で菌類学の世界的な大家となり、20世紀の菌類学の発展に多大なる貢献をした。今世紀を代表するこの偉大な菌類学者は1968年5月1日、西ボヘミアのドマージュリツェで90才の生涯を閉じた。

("Life and work of Václav Melzer" Ceska mykologie 23 (1) : 1-9. (1969) からの要約)

一 解けばその名が浮き上がる

あぶり出しキノコ・パズル (3)

田宮克哉



タテのカギ

1. 一つの誠に〇〇〇する。
2. サクラタケに近縁。
3. 車でお越しになっても〇〇〇とは。
4. 香りがなく、歯ごたえもイマイチ。
8. 荘厳〇〇曲。
10. マリを蹴っても〇〇〇を蹴るな。
11. 絶滅寸前の鳥。 (火の用心!)

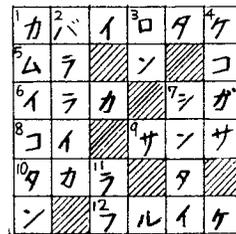
ヨコのカギ

1. 中華料理に使うキノコ。
5. 北西の方向。
6. 若語漫芸場。
7. 巻き紙は、この手法で作られていた。
9. 肩にある骨。
11. 針がなく、数字だけというのは味気ないね。
13. 〇〇益々弁ず。
14. Xモのこと。

問い：1.のナナメは何が見える？

前々号の答え

「カラカサタケ」



編集後記

*キノコが顔を出しはじめ、ソワソワしはじめた方も多いのではないのでしょうか。今年度より会の役員が増え、さっそく写真の勉強会などもおこないます。会の発展にご期待ください。今年度の表紙はキノコ人物伝です。メルツアーって人の名前だったんですね。知らなかった。次号をお楽しみに。(良)

*前号でお願いしたアンモニア菌は、何人もの申し出がありました。ありがとうございます。結果が出たら御報告します。表紙のメルツアーさんの追悼の記事が載っていた、Ceska mykologie は博物館で昨年購入したものです(1-44 巻(1947-90))。もちろん分類の貴重な記載が載っているから購入したのであって、人物列伝を書くためではないのですが。ほとんどがチェコ語で、少し英語と独語が混じる雑誌です。内容、印刷、紙等が最も充実しているのは1950年代から60年代で、最近のものはぼろぼろです。旧共産圏の大変さがしのべれます。今年はSydowiaとPersooniaを入れる予定です。複写など必要な方は博物館まで。(春)

千葉菌類談話会通信 No.7 1994年5月18印刷、発行

会長：腰野文男

事務局：千葉県立中央博物館 植物学研究科気付「千葉菌類談話会」

千葉市中央区青葉町955-2

電話：043-265-3921 Fax：043-266-2481

郵便振替口座：00100-5-550400「千葉菌類談話会」